【学校教育目標】「人間性豊かな心をもち　実践力のある生徒の育成」
－　気付き、生かす　－

若松中だより

千葉市立若松中学校
校報
第　３５　号
令和 3年 9月24日

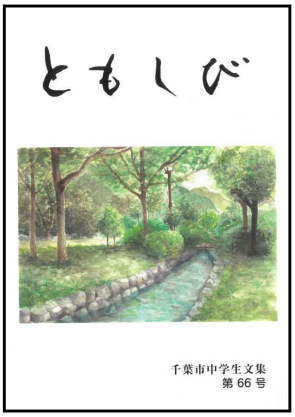
「ともしび」「本だな」掲載作品決定

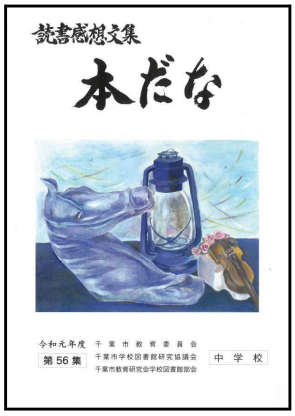
校 長　　古　市　　直　彦

長期間に及んだ休校期間の影響で、昨年度は千葉市文集「ともしび」と読書感想文集「本だな」は発行されませんでした。２年ぶりの発行を目ざして、今年は、審査に関わる職員が時間や場所を分散させる形で審査を行い、掲載作品が選出されました。

本校からは、夏休み前の授業で書いた作文などの中から以下の生徒の作品を学校の代表として選出し、応募しました。

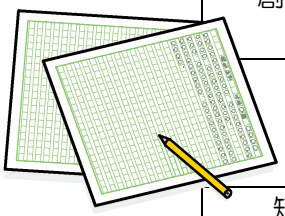
その結果、「本だな」の優秀賞に選ばれた_____さん（２－２）と、「ともしび」の優良賞に選ばれた_____さん（２－３）の作品が、それぞれ掲載されることになりました。おめでとうございます。





一昨年度に発行された
「ともしび」「本だな」の表紙

千葉市文集【ともしび】	生活・随筆	_____さん（２－３）	優良賞
		_____さん（２－４）	佳作
	紀行文	_____さん（３－４）	佳作
	意見文	_____さん（３－５）	佳作
	創作文	_____さん（２－５）	佳作
		_____さん（１－２）	佳作
	詩	_____さん（１－１）	佳作
		_____さん（１－３）	佳作
		_____さん（１－５）	佳作
	短歌	_____さん（２－３）	佳作
		_____さん（２－３）	佳作
		_____さん（２－６）	佳作
	俳句	_____さん（３－１）	佳作
		_____さん（３－２）	佳作
		_____さん（３－２）	佳作
読書感想文集【本だな】		_____さん（１－１）	佳作
		_____さん（１－１）	佳作
		_____さん（２－２）	優秀賞
		_____さん（２－２）	佳作
		_____さん（２－６）	佳作
		_____さん（２－６）	佳作
		_____さん（３－２）	佳作
		_____さん（３－３）	佳作



優秀賞を受賞した、＿＿＿さんの作品を紹介します。

好きなものを表現する大切さ

「キリンが亡くなりました」

この本はこんな最初の一文から始まる。読み進めていくと作者は、どうやらキリンについての解剖、研究をしているらしい。

私は小さい頃から虫や動物が好きで、書店に行くと必ず生物のコーナーに寄ってしまう。この本を手にとってページをめくったときの最初の一文にはとても驚いたことを覚えている。

「動物が好き。」

このように、私が好きなことを口にできるようになったのはこの本に出会ってからである。ついこの間までは正直に自分の将来の夢や好きなことを相手に伝えるのは、「なんだか恥ずかしいなぁ」と思っていた。けれど、この本の作者である郡司芽久さんは違う。

郡司さんは小さな頃からキリンが好きで、どれだけ大事な予定があってもキリンの解剖が最優先事項なのだ。ときには、

「ごめん、キリンが死んじゃって……」

「すみません、キリンの解剖の予定が入ってしまって……」

などと言って予定を全てキャンセル、遺体解剖のために急いで研究室に向かう。

私は、「これだけは譲れない」そんな信念や「これが世界一大切な物だ」などと断言できるものが見つからない。だから、郡司さんの夢に向かう真っすぐな姿勢や頑張る姿を読んでいて感じるとき、背中を押される反面、ほんの少し羨ましさも感じてしまった。

しかし、そんな郡司さんにも自分に力がないと分かり悲しむ気持ち、つまり、無力感を抱く時期があったそうだ。それは郡司さんにとって初めての解剖だ。

このときの解剖する相手は「ニーナ」というメスのキリンだった。不安な気持ちを抱えながら一息つき、丁寧に皮膚を剥がしていく。けれど現実は予想外の展開だった。解剖学書のコピーに描かれている筋肉の構造とはまるで違う姿だったのだ。解剖図に描かれたような束に分かれた筋肉の姿はどこにもない。まさに「自分の無知さを痛感する時間だった。」と郡司さんは述べていた。生身の体を扱うことが、解剖の魅力でもあり恐ろしさでもあることを初めて知った。

「無力感」私も感じたことがある。友達に質問をされたとき自分が思うような答えを返せなかったときだ。友達は気を使って「ありがとう。」と返してくれるが、きっと疑問は解決されていないだろうな、と思うことがある。そのときは友達の力になれなかった無力さや悔しさを感じる。けれど、多くの人が一度は無力感を抱くことがあるだろう。それは、自分が誰かの力になりたいと思う気持ちから生まれてくるものだと思う。それは悪いことではない。また、「自分はもっとできるはずなのに。」と理想や向上心があるからこそ抱く感情でもあると思う。郡司さんのように努力している人でも失敗するときはある。大切なのは、失敗を糧にして次に活かすことだ。初めて難しいことに取り組み、失敗してしまうことは誰だってある。けれどその経験をバネに前進することによって困難な目標も達成できるということを学び、失敗を恐れずに何事もチャレンジしたいと思った。

この本のはじめに、今は亡きキリンたちの「第二の生涯」がこの解剖だと書いてある。読み初めは、「解剖は、キリンにとってそこまで重要なことなのか。」と疑問に思っていた。しかし読み進めると、解剖に対しての郡司さんの責任感や一頭一頭への愛情を読み取ることができた。ここまでこの本に自分の好きなことを表現できるのは素晴らしい。そしておわりには、解剖したことで郡司さんが大切さに気付いたことが二つ書かれていた。

一つ目は、大切なのは手段ではなく目的だということ。自分の力ではどうしても変えられないことはある。大事なのは、壁にぶつかったそのときに、手持ちのカードを駆使してどうやって道を切り開くか。それが大切なことだ。全て自分の力で変えていく必要はない。壁にぶつかることは誰にでもある。そんなことを教えてくれた。

二つ目は、好きなことを好きだという大事さだ。好きな物も色んなことで表現することで同じ興味を持った人や、手を差し伸べてくれる人に出会えるというのだ。だから私は、これから好きなことをたくさんの人に伝えて同じ興味を持った人と幸せを共有したいと思った。

私はこれまで、自分の好きなことを口にしたり、表現したりすることが恥ずかしいことだと思っていた。けれど、この本を読んで自分の好きなことに真っすぐになり、それに向かってあきらめずに努力を続ける。そうすれば、どんな困難にも立ち向かうことができるのだと知ることができた。そして、自分が好きだと思うことを見つけてそれに向かって努力できる人生を歩みたいと思った。

「キリン解剖記」
（郡司　芽久　作）ナツメ社

校報「若松中だより　第３５号」をお届けします。ご意見やご感想を広く募集しております。
お気づきの点等ございましたら、下記までご連絡ください。
（　千葉市立若松中学校　　校長：古市　直彦　　☎０４３－２３２－６１２５　）